

主 題：いと高き方の恵みに感謝して
聖書箇所：詩篇21篇

テーマ：あなたは神様に感謝する者ですか？

「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」（Iテサ5：18）、これは皆さんもよくご存じのみことばの一つだと思います。すべての事について感謝する、これは信仰者ひとりひとりに神様が求めておられることでした。私たちはそのことをよく知っています。でも同時に、このみことばがそれぞれにとって非常に大きなチャレンジであることもよく知っています。なぜならこの点において、私たちはみな例外なく弱さを覚えることがあるからです。私たちはいろいろな神様の恵みや祝福を日々の生活の中でいただいています。しかし、それにもかかわらず、神様の存在や神様がこれまでに何をなしてくださったのかを忘れて、心が不満や悲しみ、怒りに満ちてしまったりすることがあるのです。

聖書の中にもそのような者たちの例がありました。覚えていますか？ルカ17章に出てくる10人のツアラアトに冒されていた者たちがまさにそうでした。病を患って、苦しみの中にあつた彼らはイエス様にあわれみを求め、そしていやされたのです。彼らは非常に喜びました。しかし、10人のうちのたったひとりだけがイエス様のもとにひれ伏して感謝をささげたのです。そのことに対して、イエス様はルカ17：17-18でこう言われています。「:17 そこでイエスは言われた。「十人きよめられたのではないか。九人はどこにいるのか。:18 神をあがめるために戻って来た者は、この外国人のほかには、だれもいないのか。」と。イエス様が求めておられたことは明白でした。すばらしいみわざによっていやされた者たち、神様の偉大な力を目の当たりにした者たちにふさわしい応答は、感謝を表してその方をほめたたえることだったのです。しかし、そのことを残りの9人はしませんでした。

今朝、皆さんと改めて考えていきたいことは、神様に感謝するということです。これから内容を見ていく前に、皆さん、いま一度自分自身に問いかけてみてください。あなたはきょう、感謝をする者でしょうか？あなたの心は今、神様に対する感謝で満ちあふれているのでしょうか？私たちは、私たちにすべてがうまくいっている時は容易に感謝することができます。でも、私たちを取り巻く環境が難しく、つらい時は果たしてどうでしょう？周りの人や状況が自分にとって都合の悪い状態ならどうでしょう？自分の考えや計画していたことが崩れてしまったり、心の喜びや平安が失われてしまったりした時はどうでしょう？物事が思いどおりに行かない時も、私たちは果たして変わらずに神様に感謝する者でしょうか？次の日の朝起きて、仕事に向かっている時に渋滞したり、電車が遅延して仕事に遅刻してしまうような時はどうでしょう？仕事や勉強にどれだけ熱心に取り組んでも、願っていた結果や成果が出せなかったらどうでしょう？家族や友人、兄弟姉妹との間に思い違いなどがあって、争いが生じた時はどうでしょう？挙げだしたらきりがありません。日々の生活の中を見渡してみれば、不平や不満を口にしても仕方ないと、自分に言い聞かせてしまうような場面に出くわすことが多々あります。神様、なぜですか、どうしてこんな場面に出くわすのですか、どうしてこんな苦しみに遭わなければいけないのですかと、心のうちで叫んでしまうような場面に出くわすこともあるでしょう。でも神様は、そんな中にあっても、良い時も悪い時もいつもすべてのことについて感謝する者として、私たちが歩いていくことを求めておられました。果たして私たちはそんな者として日々を歩んでいるのでしょうか？言えることは、私もそうですし、皆さんひとりひとりもこの点において、まだまだ成長しなければいけないところがたくさんあるということです。

今朝、私たちがともに学ぶみことばは詩篇 21 篇です。この詩篇は、神様に感謝をささげることの大切さを私たちに改めて教えてくれています。そのことを一緒に考えてみましょう。ではまず、いつものようにみことばをお読みしますので、詩篇 21 篇を見てください。

詩篇 21 篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 【主】よ。王はあなたの御力を、喜びましょう。あなたの御救いをどんなに楽しむことでしょうか。:2 あなたは彼の心の願いをかなえ、彼のくちびるの願いを、退けられません。セラ :3 あなたは彼を迎えてすばらしい祝福を与え、彼のかしらに純金の冠を置かれます。:4 彼はあなたに、いのちを請い求めました。あなたは彼に、とこしえまでの長い日々を与えられました。:5 御救いによって彼の栄光は、大きい。あなたは、尊厳と威光を彼の上に置かれます。:6 あなたは、とこしえに彼を祝福し、御前の喜びで彼を楽しませてくださいます。:7 まことに、王は【主】に信頼し、いと高き方の恵みによってゆるがないでしょう。:8 あなたの手は、あなたのすべての敵を見つけ出し、あなたの右の手は、あなたを憎む者どもを見つけ出します。:9 あなたの御怒りのとき、彼らを、燃える炉のようにされましょう。【主】は御怒りによって彼らをおのみ尽くし、火は彼らを食い尽くすでしょう。:10 あなたは、地の上から、彼らのすえを滅ぼされましょう。また、人の子らの中から、彼らの子孫をも。:11 彼らが、あなたに対して悪を企て、たくらみを設けたとしても、彼らには、できません。:12 あなたは彼らが背を見せるようにし、弓弦を張って彼らの顔をねらわれるでしょう。:13 【主】よ。御力のゆえに、あなたがあがめられますように。私たちは歌い、あなたの威力をほめ歌います。」

○歴史的背景

さて、これから私たちが考えていくこの詩篇 21 篇は、著者がダビデであることを除けば、残念ながら詳しい歴史的背景についてよくわかってはいません。しかし、多くの人は今回見て行く詩篇 21 篇と、前回学んだ詩篇 20 篇に多くの共通点があることから、この二つが深く結びついたものであると考えています。前回、私たちが詩篇 20 篇を学んだ時、その中には戦いに出て行こうとする王様のために、民が祈っている姿が記されていました。イスラエルの民たちは、彼らの王であるダビデのために熱心に祈っていたのです。今、その祈りの内容のすべてを振り返ることはできませんけれども、例えば彼らはダビデが戦いの中で敵に攻め立てられ、苦難に陥るような時に、主の助けがあるようにと祈っていました。20 : 1、9には「:1 苦難の日に【主】があなたにお答えになりますように。ヤコブの神の名が、あなたを高く上げますように。……【主】よ。王をお救いください。私たちが呼ぶときに私たちに答えてください。」と書いていました。このようにして民は戦いに出て行く王様のために、王様に助けがあるように、守りがあるように、救いがあるようにと祈っていたのです。また、彼らは神様がダビデの声に耳を傾けて、彼の心に持っている願いや計画をかなえてくださるようにと祈っていました。20 : 4を見ると、「主があなたの願いどおりにして下さいますように。あなたのすべてのはかりごとを遂げさせて下さいますように。」とあります。ですから、以前見た詩篇 20 篇では、戦いに出発して行くダビデ王の上に神様の救いや守りがあることをイスラエルの民が訴えている様子を見て取ることができたのです。彼らは自分たちの偉大な神様が王の上に必ず勝利をもたらしてくれると確信して祈っていました。それが詩篇 20 篇でした。

そして、その流れで詩篇 21 篇を見ていけば、今度は戦いを終えて、凱旋した王様が民とともに神様に感謝している様子を見て取ることができます。どうしてそれがわかるのかというと、二つの詩篇のことばのつながりに注目して見てください。先ほど見た詩篇 20 篇の最後 9 節で、彼らは「【主】よ。王をお救いください。」と訴えていました。それに続く 21 篇 1 節では「【主】よ。王はあなたの御力を、喜びましょう。あなたの御救いをどんなに楽しむことでしょうか。」と書いています。また 20 : 4 で、「主があなたの願いどおりにして下さいますように。」と民は願っていたのですけれども、21 : 2 では「あなたは彼の心の願いをかなえ、彼のくちびるの願いを、退けられません。」とありました。つまりダビデやイスラ

エルの民たちは、戦いの前にささげた祈りに神様がこたえてくださって、必要な助けや勝利を与えてくださったことをここで感謝していたのです。神様、あなたに心から感謝します、あなたは確かに祈りにこたえてくださいました。王に救いを与えて、戦いに勝利をもたらしてくださいました。そんな偉大な御力、御救いを喜んで賛美しますと。彼らは神様に信頼して、戦いの前に祈りをささげ、戦いに勝利した後も神様が何をなされたのか、いや、もっと言えば、神様がどれほど力あるすばらしい存在かということをおぼろげに覚えていることはありませんでした。彼らはいつもどんな神様が自分たちとともにいるのかということをおぼろげに覚えているのです。だからこそ、彼らはそんなお方の前に心から感謝をささげていました。

○ダビデやイスラエルの民がささげた感謝：三つの姿

そしてもちろん、そんな彼らの姿から私たちが学べることはたくさんあります。もっと言えば、ダビデや民がこの詩篇を通して、大きく三つの感謝をささげている姿を私たちは見て取ることができます。一つ目に彼らが過去を振り返って感謝をささげている姿を見て取ることができますし、二つ目に主を見上げて感謝をささげている姿を見て取ることができます。そして最後三つ目に、先を見据えて感謝をささげている姿を見て取ることができます。それぞれどんなことが述べられているのかを順を追って考えてみましょう。

1. 振り返ってささげる感謝 1-6節

さて、まず一つ目の姿として、ダビデやイスラエルの民が過去を振り返って感謝をささげている姿が1-6節に記されていました。彼らは戦いの中で、神様がなしてくださったことを振り返って、そのことを喜び、感謝していたのです。1節は「【主】よ。王はあなたの御力を、喜びましょう。あなたの御救いをどんなに楽しむことでしょう。」と始まっていました。

1) 神に感謝をささげる

ここで注目してほしいことは、人々がだれに対して感謝をささげているかということです。「主よ。王は自分の御力を、喜びましょう。自分の力による御救いを楽しむでしょう」と書いてありました？そうは言われていませんでした。「あなたの御力」、「あなたの御救い」と、神様に対して心が向いていたのです。自分自身の力を誇るのではなく、神様の力や救いというものを喜んでいました。考えてみれば、確かにイスラエルの王様として戦いに出て行って、敵を打ち負かしたのはダビデでした。しかし、実際に戦いに勝利をもたらされたのは、ほかのだれでもない偉大な神様の力であることを、彼らはよくわかっていたのです。彼らは王様が戦いに行ったことをわかっていました。でも、王様とともにいて、勝利をもたらしてくださいましたその源が神様なのだということをよく理解していました。

そして、そのことをわかっていたのは、何も民だけではなく、王であるダビデ自身もそのことをよくわかっていました。彼の人生を振り返ってもそれは同じことです。ダビデという人物は、その生涯においていろいろな敵と戦っていました。王様としても、ペリシテ人やモアブ人、アマレク人といった者たちと戦って勝利をおさめていました。また、ダビデは王様になる以前、まだ羊飼いだった時にも、自分よりも何倍も大きなゴリヤテと戦っていました。サウルやイスラエルの兵士たちは、このペリシテ人の兵士の前に恐れを抱いて意気消沈していたのです。しかし、そんな中でダビデは一つの石でもってゴリヤテを撃ち倒していました。その戦いに赴く直前に、ダビデとサウル王様の間でなされた会話がIサムエル17：33-37に記されていました。「:33 サウルはダビデに言った。「あなたは、あのペリシテ人のところへ行って、あれと戦うことはできない。あなたはまだ若いし、あれは若い時から戦士だったのだから。」:34 ダビデはサウルに言った。「しもべは、父のために羊の群れを飼っています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、:35 私はそのあとを追って出て、それを殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています。:36 このしもべは、獅子でも、熊でも打ち殺しました。あの割礼を受けていないペリシテ人も、これらの獣の一匹のようになるでしょう。生ける神の陣をなぶったのですから。」:37 ついで、ダビデは言った。「獅子や、熊の爪から私を救い出してくださいました【主】は、あ

のペリシテ人の手からも私を救い出してください。」サウルはダビデに言った。「行きなさい。【主】があなたとともにおられるように。」と書いています。ダビデは最初から、どんな時も変わらずに主に信頼していました。たとえ周りの人たちの目に不可能に思えるような状況であったとしても、主だけは必要な救いを与えることができるお方だと彼は確信していました。それがゆるぐことはなかったのです。

そして、その確信はダビデだけではなくて、民も同じように改めて認めました。だから続く21:2で「あなたは彼の心の願いをかなえ、彼のくちびるの願いを、退けられませんか。」とありました。イスラエルの民は熱心にダビデのために祈っていました。そして神様が彼を守り導いて勝利を与えられたことを目の当たりにした時に言うのです。神様、あなたは確かに王を戦いの中で助け出されました。彼の声を聞いて、心の願いをかなえられました。あなたは彼とともにいてくださいました。そのことを感謝しますと。彼らは戦いに勝利をもたらされたお方がだれなのかに心をとめていました。また、自分たちの祈りにこたえてくださったお方がだれなのかということも忘れることはありませんでした。だからこそ、その方にふさわしい感謝をささげ、ほめたたえていたのです。戦いに勝利しました、でも、その戦いの勝利の源は私たちの神様だ、だからその方に賛美をささげようと。

2) 神様がダビデに与えた祝福

(1) 冠

でも、それで彼らの感謝が終わったわけではありませんでした。続けて3節からより具体的に、そんな神様がダビデに与えられた祝福について記されています。まず3節に「あなたは彼を迎えてすばらしい祝福を与え、彼のかしらに純金の冠を置かれます。」とあります。神様はダビデの祈りを聞き入れて、彼に勝利を与えられました。でもそれだけではなかったのです。それらに加えて、すばらしい祝福——彼のかしらに純金の冠を置かれたのです。この「冠」というのは敵に勝利したことの名誉や称賛を象徴するものでした。恐らくこれは戦いで倒した敵の王様から得た戦利品を指していたことでしょう。神様は自分に信頼して、自分に従ったダビデに対して祝福として「冠」を与えられました。そのようにして、神様は彼の名誉をたたえて豊かに彼のことを祝福されたのです。

(2) とこしえまでの長い日々

また続く4節にもこう書かれていました。「彼はあなたに、いのちを請い求めました。あなたは彼に、とこしえまでの長い日々を与えられました。」と。王は主にいのちを請い求めていました。言いかえれば、彼は戦いの中であって、敵にいのちをねらわれ、死の危機に瀕していたということです。そんな危機に瀕していたからこそ、その中で彼は神様が働いて、その状況から助け出してくださいと求めました。いのちを助けてくださいと請い求めていたのです。そして、その応答として神様が彼に与えたものが続きに記されていました。「あなたは彼に、とこしえまでの長い日々を与えられました」と。驚くべきことに神様がなされたのは、ただ追い詰められていた状態からダビデを救い出すことだけではなかったのです。神様は王のいのちをその時だけ守られたのではなく、彼に「とこしえまでの長い日々」を与えられたのです。

これが何を意味しているのかについては、いろいろな考えがあります。ある人たちはここで主が王のいのちを引き延ばすことを約束されたのだと考えています。しかし多くの人たちがこれはダビデと神様との間になされた約束、ダビデの契約を思い起こさせるものだったのだと考えているのです。そのことがⅡサムエル7章に記されているのですけれども、特に12-13節で主はこんな約束をダビデに与えられていました。「:12 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。:13 彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも堅く立てる。」と。皆さんもよくご存じのとおり、ダビデ自身がとこしえに生きることはありませんでした。彼もほかの人と同じように時が来れば墓に入れられたわけです。しかし、ここでダビデの子孫から、とこしえに彼の王国を立てる王様が現れると約

束されていました。その約束は、ダビデの子孫として誕生した約束の救い主イエス・キリストのうちに成し遂げられたのです。神様はこうしてダビデの王座が彼の死後も終わることなく、いつまでも強く立つということをここで思い起こさせていました。自分の死後もその王座は決して終わることはなく、子孫から生まれる者が王の王として永遠に君臨する、それが彼に与えられたすばらしい祝福の一つだったのです。

(3) 彼の上に尊厳と威光を置かれた

そして最後、5-6節で「:5 御救いによって彼の栄光は、大きい。あなたは、尊厳と威光を彼の上に置かれます。:6 あなたは、とこしえに彼を祝福し、御前の喜びで彼を楽しませてくださいます。」と記されていました。ダビデは神様からの祝福を心から喜んで楽しんでいました。神様は戦いの中で、彼を救い出して勝利を与えられただけでなく、彼の上に尊厳と威光を置かれたのです。これは言い換えれば3節とほぼ同じですが、神様が彼の上に誉れと栄光を与えられたということです。また何よりダビデは、神様の御前で楽しんでいました。神様の臨在が彼の心に大きな喜びをもたらしていたのです。「御前の喜びで彼を楽しませてくださいます」という表現を見た時に、皆さんは以前見た詩篇の中に、これと似たものが出てきたことを思い返すかもしれません。詩篇16:11で、ダビデはこのように言っていました。「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」と。ダビデは確かにその生涯において、さまざまな苦しみや困難を経験しました。しかし、彼は自分の心にあふれんばかりの喜びをもたらしてくれる存在が一体だれなのかということをおぼろげに覚えていることはありませんでした。どこに楽しみがあるのかをいつも覚えていたのです。そしてだからこそ、彼はその源である神様が変わらずに信頼しようとしていました。そして、そんなダビデを神様は戦いの中で守り導いただけでなく、勝利を与えて大いに祝福されたのです。ダビデは民と一緒にあって、そのことを振り返って神様に感謝をささげていたのです。

◎私たちが感謝を忘れる時

こうして神様がどのようなお方なのかということ、何を成し遂げられたお方なのかということをおぼろげに覚えていることは、今の私たちにとっても非常に大切なことです。皆さん、少し考えてみてください。私たちが感謝をすることを忘れるのはどんな時でしょう。いろいろな場面を挙げることができるかもしれません。でも一つははっきりと言えるのは、神様がどれほど偉大なお方なのかということをおぼろげに忘れる時です。例えば、私たちはみことばを通して、神様がご自身の計画に従って召された人々のためにはすべてのことを働かせて益としてくださるお方であることを知っています。また、この方が間違いや失敗を犯すことは絶対になさらない、すべてのことをご自分の意のままに計画し、定められた時に、ご自分の目的を果たされる主権者であることも私たちは知っています。私たちは神様が人の頭では到底はかり知ることのできない知恵と力に富んだすばらしいお方であることも知っています。にも関わらず、私たちは試練や苦しみに遭遇した時に、神様、どうしてなのですか、なぜ自分がこんな目に遭わなければいけないのですかと神様を責めることがあるのです。私たちはこうして自分の思いどおりにならない、自分の望まない状況に置かれれば、自分ではなく、ほかのもの——神様や周りの人、環境を非難することがあります。こんなことばを聞いたことはありませんか？あなたが先に始めたことだから自分にもやり返す権利がある、こんな状況に置かれたら、こんな態度をとっても仕方ありませんと。そうやって私たちはさまざまな試練や苦しみを味わう時に、いろいろなもののせいにするところがあるのです。

でも、これはまさにこの世に罪が入った時に、アダムとエバが行っていたことです。思い返してみてください。神様がエバを問われた時に、エバは蛇のせいになりました。また、神様がアダムを問われた時に、アダムはエバのせいになりました。彼は、あなたが私のそばに置いた女が悪いのですと言ったのです。彼が言いたかったことは、自分にエバを与えた神様が悪いということです。そうやって自分の過ち

を神様のせいにしたのです。そしてこれが同じ罪の性質を受け継いでいる私たちの自然な応答でもあります。私たちも同じ罪の性質を持っているからこそ、苦しみや困難に直面する時に、神様に疑いを抱いて、神様、私はこんな状況を祈り求めていたわけではありませんと言うことがあるのです。なぜあなたは私にこんなことをするのですか、あなたがこんな状況に私を置かなければ、私は憤ることも、絶望することもなかったのです。もしかすると、皆さんの中に今自分自身の置かれている状況に不満を覚えている方がいるかもしれません。どうしてこんな人と毎日のように接しないといけないのだろう、なぜこんな状況に置かれているのだろうと。もしそんなことを感じている方がいるのであれば、よく考えてみてください。私たちはどんな状況にあっても感謝することができます。なぜかというと、私たちの愛する主権者なる神様が、私たちひとりひとりを目的を持って、その状況に置かれているからです。この方は決して過ちも間違いも犯しません。力あるお方があなたをその場に置かれているのです。私たちの理解など到底及ばない知恵と力のある偉大なるお方がその状況をよしとされているのです。それはよい時もそうですけれども、私たちに試練が与えられている時も同じです。だとすれば、それに対して私たちの正しい応答は一体何でしょう？ 私たちにできることは、そんなすばらしい、力ある神様に信頼してこの方が受けるにふさわしい感謝をささげることです。ダビデやイスラエルの民たちはそのことを実践していました。では、私たちはどうでしょう？

2. 見上げてささげる感謝 7節

二つ目、ダビデや民が神様のなされたことを振り返るだけでなく、神様を見上げて感謝をささげている姿を7節に見ることができます。7節「まことに、王は【主】に信頼し、いと高き方の恵みによってゆるがないでしょう。」と記されていました。この箇所では、大きく二つ切り離すことができない王様と神様とのすばらしい関係が描かれていました。どういうことかということ、前半には「まことに、王は【主】に信頼し」と書いてありました。ここで出てきている信頼するということばには「確信を置く」とか「安心する」といった意味が含まれています。要するに、ダビデは主が自分に助けを与えることのできるお方だと心から確信して、この方のうちに安らいでいたということです。神様が必ず自分にとってよいことを成し遂げてくださると信じていたからこそ、彼は安心していました。この方に信頼していれば大丈夫だと信じていたからこそ、たとえ戦いに出て行く時でさえも、彼はゆるがぬ希望を持つことができたのです。こうして前半部分には神様に対するダビデの信仰が描かれていました。

そして、続く後半には「いと高き方の恵みによってゆるがないでしょう」書いてありました。ここに記されていたのは神様のご性質でした。「恵み」ということばがここで用いられています。この「恵み」というのは、聖書で頻りに主との契約、またその契約に対する主の誠実さを表すのに用いられることばです。決して途絶えることのない神様の変わらない愛を表していました。ダビデは、神様が自分を助けることができる力を持ったお方であることを覚えていました。同時にかつて自分を王にすると契約を結んでくださった神様が、ただ約束を交わしただけでなく、その約束を必ず守られる誠実なお方であることを覚えていたのです。ここで大切なのは、彼の確信の土台がいと高き方の決して変わることはない恵みにあったということです。彼は自分自身の力や知恵、周りの者に信頼しようとはしていませんでした。それはそれらのものが不十分で変わりゆくものだからです。どの時代にあったとしても絶対に変わることはない神様の愛に信頼したからこそ、彼はゆるがされることがありませんでした。ゆるがない、変わらないものに信頼したからこそ、彼もゆるぐこともなく変わることもありませんでした。そして、そんな変わらない主の恵みに対して彼は感謝をささげていたのです。

これは今の私たちにとっても同じく重要なことです。私たちも神様の恵みというものを忘れてしまえば、そこには不平や不満、高慢というものが必ず生じてきます。救われる前、自分たちがどのような存在だったのかを忘れてしまえば、大きな問題が生じます。少し思い返してみてください。「私たちが己の欲に従って、罪と罪過の中に死んでいた時に、私たちをそこから救い出したのは私たちの力でした」

ではないですよ？主の恵みでした。「私たちが創造主に逆らって、罪の奴隷として神様の忌み嫌われることを行っていた時、私たちを義の奴隷として生まれ変わらせたのは私たちの努力でした」ではないですよ？主の恵みでした。本来であれば、自分たちの罪ゆえに神様の御怒りにしか値しなかった私たちを救い出してくださったのは、ただ主の恵みでした。私たちがどれだけよい行いをしたとしても、だれにもどうすることもできなかった罪の問題を、わたしたちの代わりに十字架の上で贖ってくださったイエス・キリストのみわざは、ただ、主の恵みでした。救いは始めから終わりまで、そのすべてが主の変わらない恵みのわざによってなされたのです。だから私たちはだれひとりとして誇ることはできないのです。エペソ2：4-5でも「:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——」と言われていました。だからこそどんな状況に置かれたとしても、たとえ自分の身に何が起こったとしても、唯一私たち信仰者だけがいつも神様に感謝することができるのです。なぜだと思います？それは私たちが恵みによって救いを手にしたからです。かつて暗闇の中をさまよって、自分の心を満足させる何かを探して、渴いていた私たちが、キリストのうちに本当の満足を見出すことができたのです。救いによって、ほかのどんなものにも勝る神様との交わりを手にすることができました。私たちはそれを与えられているからこそ、私たちの周りで何が起こっていたとしても喜ぶことができるのです。恵みによって救われた、これだけでも私たちが神様に感謝をささげるのに十分な理由ではないでしょうか？

しかし、私たちに恵みによって与えられたのは救いだけではありませんでした。救われた後もクリスチャンとして歩いていく原動力となるものも主の恵みでした。思い返せば、その生涯において、さまざま苦難や迫害を経験し、苦しみで弱っていたパウロもⅡコリント12：9-10でこう言っていました。「:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」と。あらゆる困難を味わっていたパウロを支えるのに十分だったもの、それは主の恵みでした。そして感謝なことに、この同じ主の恵みが今の私たちにも与えられているのです。私たちを罪から救い出してくださったその恵みが、また日々の生活にあって、試練や苦しみを経験する中で、私たちをしっかりと支えることのできるその恵みが、そんな力が今、私たちには与えられています。何をすることも私たちにとって十分な恵みがもうすでに与えられているからこそ、私たちはどんな時も変わらずに喜び、感謝をささげることができるのです。そしてもし私たちがそのことを忘れれば、おのずとつながるのは、不平や不満や高慢といった罪です。だからこそ、私たちは自分たちがどのような存在だったのか、どのような救いが私たちに与えられたのか、主の恵みを覚え続けることです。ダビデや民は神様を見上げて、特にこの方の変らない恵みに信頼し、感謝をささげていました。では、私たちはどうでしょう？

3. 先を見てささげる感謝 8-13節

そして最後三つ目に、私たちはダビデや民がこれから先に神様がなされることを見て、感謝をささげている姿を8-13節に見て取ることができます。彼らはこれまでになされてきたことを振り返って感謝をささげ、主の恵みを覚えて感謝をささげただけでなく、そんなお方がこれから未来でなされることを覚えてほめたたえていました。8節を見ていただくと「:8 あなたの手は、あなたのすべての敵を見つけ出し、あなたの右の手は、あなたを憎む者どもを見つけ出します。」と書かれています。まず皆さんにこの箇所注目してほしいのは、戦いに勝利した後も彼らはまだそこに敵が残っていることをよくわかっていたということです。彼らはこれから先もいつか必ず敵との戦いに直面することを予期していました。しかし、その中でも彼らは神様に信頼していたのです。彼らの態度は変わりませんでした。もちろん彼

らは今まで見てきたように、かつての戦いに勝利したことを喜んでいました。しかし、同時にこの先やって来る敵を、この先やって来る試練や困難でさえも神様に感謝していたのです。少し考えてみてください。問題が解決したら私たちは喜ぶのです。でも、そのすぐ後にさらなる問題が迫ってきたら、果たして私たちはどのようにふるまうのでしょうか？彼らは変わることなく、神様に賛美をささげていました。どんなことが待ち受けていたとしても、恐れや悲しみを抱くことがなかったのです。一体なぜ彼らがそのような態度をとることができたのかというと、それは彼らの感謝の根底が、迫りくる状況ではなく、どんな時も変わらない神様のうちにあったからです。彼らは状況に目を向けるのではなく、神様に信頼していました。彼らはわかっていました。確かに敵はまだそこらじゅうに存在している、でも私たちの神様は決して変わらないお方だと。だからこの先どんなことがあったとしても、結果は変わらない。この方に信頼さえすれば、再び勝利を手にすることができると。彼らの過去の経験が神様に対する信頼をますます強め、神様のすばらしいみわざを期待することへとつながっていました。

具体的にどんなみわざを期待していたのでしょうか？8-10節に「:8 あなたの手は、あなたのすべての敵を見つけ出し、あなたの右の手は、あなたを憎む者どもを見つけ出します。:9 あなたの御怒りのとき、彼らを、燃える炉のようにされましょう。【主】は御怒りによって彼らをもみ尽くし、火は彼らを食い尽くすでしょう。:10 あなたは、地の上から、彼らのすえを滅ぼされましょう。また、人の子らの中から、彼らの子孫をも。」と書いてありました。彼らが期待していたことは、神様がイスラエルの敵のすべてを滅ぼされることでした。義なる審判者である神様が、ご自分に敵対する者たちを正しい怒りの火でもってさばいてくださることを望んでいたのです。この神様がさばきを下される時に、それから逃れることができる者はただひとりとしていませんでした。なぜかというと、この方がすべての敵、憎むものをその御手を伸ばして見つけ出されるからでした。この神様の燃える御怒りを前に、罪人はだれひとりとして隠れることも、逃げることも、立っていることさえできませんでした。敵には厳しいさばきが待っていたのです。

これを聞いてある人は思うかもしれません。一体どうして神様はそんなにも厳しいさばきを与えられるのですかと。続きの11-12節で「:11 彼らが、あなたに対して悪を企て、たくらみを設けたとしても、彼らには、できません。:12 あなたは彼らが背を見せるようにし、弓弦を張って彼らの顔をねらわれるでしょう。」と記されていました。なぜ彼らの上に主の燃える怒りの火が注がれるのか、それは彼らが悪を企てて意思を持って神様に逆らったからでした。また、同時に彼らはさまざまな策略を立てて神の民をも苦しめようとしていました。でもそんな策略を立てようとも、結局、「彼らには、できません」と書いてありました。つまりどんなに人が知恵を働かせて、悪事を企てて、いろいろな壮大な計画を立てて神様を攻撃しようとしたとしても、この方の前にはすべてが無意味だということです。同じことが以前見た詩篇2:1-2、4でこう言われていました。「:1 なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。:2 地の王たちは立ち構え、治める者たちは相ともに集まり、【主】と、主に油をそそがれた者と共に逆らう。……:4 天の御座に着いている方は笑い、主はその者どもをあざけられる。」と。偉大な力を持った神様の前には、全知全能の神様の前にはどんな敵の策略もむなしいものでした。彼らは神様のさばきの前に立つことなどできるはずもなく、背を向けて逃げ出すしかないのです。

ですから、もし今もなお神様の前に逆らって、自分の望むままを生きている人がこの中におられるのだとすれば、どうかここに記されている警告によく耳を傾けてください。神様のさばきは必ずやってくると、みことばははっきりと教えていました。今、あなたは神様のことなど考えずに、自分自身を満足させることだけを追い求めているかもしれません。神様を無視して歩もうと、そこには何の結果も伴わないと思っているかもしれません。しかし、さばきの日が来れば、神様は必ず正しく罪をさばかれます。別の箇所でもこのように言われていました。ローマ2:5-6に「:5 ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現れる日の御怒りを自分のために

積み上げているのです。:6 神は、ひとりひとりに、その人の行いに従って報いをお与えになります。」と。今、神様に逆らって歩んでいる者たちはみんな、自分の上に御怒りを積み上げているのです。だれひとりとして、その怒りの火から逃れることはできません。そしてそのさばきを前にして、御怒りの日にどれだけ自分が間違っていたと後悔したとしても、もうその時には手遅れなのです。だからこそ、きょうまだ機会が残されている時に、どうか自分の罪を認めて、キリストを自分の救い主として受け入れてください。この方を信じて悔い改めて、神様のために生きる人生を始めてください。

○まとめ

そしてこの詩篇は、最後13節で「:13 【主】よ。御力のゆえに、あなたがあがめられますように。私たちは歌い、あなたの威力をほめ歌います。」とまとめられていました。振り返ってみれば、この詩篇は、「【主】よ。王はあなたの御力を、喜びましょう。あなたの御救いをどんなに楽しむことでしょうか。」という感謝で始まり、「私たちは歌い、あなたの威力をほめ歌います」、そんな感謝で終わっていました。ダビデや民は、これまで神様が何をなされたのかだけでなく、この先何を成し遂げられるのかということに心をとめ、そのことに期待をしていたのです。しかし、今の私たちは、この当時のダビデたち以上にすばらしい事実を知っています。ダビデに約束されていたとおりに、イエス・キリストがこの地上に来られて、十字架にかかって墓に葬られただけでなく、主に勝利してよみがえり、今は神の右の座に着かれておられるのです。そしてこの方はいつの日か再び偉大な主の主、王の王としてこの地上に帰って来られます。こうして、私たちは私たちの愛する救い主であり、勝利者である主とお会いして、この方と永遠をともに過ごす日がやって来るという約束を持っているのです。必ずそうになると、私たちは期待することができます。どうしてかというと、それはこの神様がダビデやイスラエルの民にそうであったように、どんな時も約束を守られる誠実で変わらない神様だからです。だから皆さん、私たちが振り返る時に、神様のそのすばらしい御手のわざを覚える時に、私たちは感謝をささげることができます。この方が決してゆるがない、変わらないお方だと信頼することができます。私たち主を愛するひとりひとりには、こんなすばらしい希望が与えられているのです。

だとすれば、こんなすばらしい希望に対して、神様に対してあなたはどのように応答するでしょうか？確かに日々の生活の中において、私たちは困難や試練に遭うことがあります。私たちの頭では到底理解できないような大変なことも起こります。しかし、私たちにはすべてのことを支配して、必要な助けを与えてくださることができる、そんな主権者なる神様がともにいてくださるのです。確かに、さまざまな問題が起こって、心に痛みや悲しみを覚えて、弱さに苦しむこともあります。しかし、私たちには、私たちを支え、私たちにとって十分な主の恵みが与えられているのです。確かにこの世にはいろいろな悪がはびこっていて、罪との葛藤で苦しめられることも、私たちは多々経験します。しかし、罪や死に対して勝利された主が再び帰って来られて、敵を滅ぼし、私たちの涙を拭き去ってくださる日がやって来るという約束を持っているのです。この約束は必ずなります。だとすれば、そんな神様に対して私たちはどんな応答をするでしょうか？こんな神様にふさわしい一つの応答、それは私たちが感謝をすることです。そのような感謝をする者として、この1週間もともに歩んで行きましょう。